

## 『トリストラム・シャンディ』管見

— ウォルターの苦悩 —

河村昭夫

## 1

ロレンス・スターンの『トリストラム・シャンディ』（一七六〇—七）には周知のように様々な種類の異様なページが含まれている。黒塗りのページ（I—12）、大理石模様のページ（III—36）、空白のページ（X—18・19）、さらには第六巻第四〇章で作者が先行五巻の話の筋の進行状況を示すためと称している曲線の図形などである。一見冗談めかしたように見えるページであるが、そこにはなまなかな説明では言い尽くせないほどの多くのことが隠されているのだ、と語り手トリストラムはいう。

この作品における語り手トリストラムや父ウォルターの饒舌の不毛についてはすでに検討した<sup>(1)</sup>。観念と言葉の虜になっているウォルターの饒舌が如何に空しいものであるかを、作者はそのパロディである語り手の饒舌を通して見事に戯画化している。ウォルターが思考の厳密さを求めれば求めるほどその思考が空転し、多弁に語れば語るほど観念を伝達する言葉はより不毛になるという皮肉な現象を揶揄する作者の筆法は鋭い。そして、人の表情や仕草が、さらには、図や模様のほうがより豊かな表現手段であり、言葉以上に確実な伝達の手段なのだという作者の主張は、こ

の饒舌な作品に込められた作者の最大の皮肉となっている。

それらの一つである大理石模様のページについて、語り手は読者に向かって挑戦的な口調で次のようにいう。

……多量に書物を読んでいなければ、というのは、あなたにもおわかりのように、豊富な知識がなければという意味ですが、次に出る大理石模様のページ（私のこの作品のごたまぜの象徴なんですがね！）、このページの寓意は見抜けないでしょうね。それはちょうど、世間の人たちがいくら賢くても、例の黒塗りのページの暗黒のヴェールの下に謎のごとく隠されたままになっている、多くの意見や行為や真実の解明ができなかったのと同じことなんですよ<sup>②</sup>。（Ⅲ—36, p. 268）

作者がいう「ごたまぜの象徴」とは何を意味するのだろうか。このページにはどのような寓意が含まれているというのであろうか。本論ではこうした語り手の言葉を手がかりに、ウォルターの挫折と嘆きの意味するところを考察してみたい。

## 2

この作品が発表された当時、宗教界を中心にかなり強い批判が出たが、一般には好評であった。しかし、その内容の猥雑さが災いしてか、その後イギリス国内では一九世紀を通してあまり顧みられなくなった。今世紀になって、この作品に新たな視点から評価を与え、その存在を再認識させた作家の一人がヴァージニア・ウルフである。彼女はこの作品の意外な新しさに注目して、「スターンは外的なものから内的なものへとわれわれの興味を移らせる。……旅の案内やありふれた街道よりもむしろ彼自身の心の屈折を選ぶという点で、スターンは不思議にもわれわれの時代に属している」<sup>③</sup>という。批評家たちも作家たちと同様に、人間の心ないし意識の微妙な陰影の描出に関心を向けるよう

になった。例えば、『トリストラム・シャンディ』において、作者の気紛れな逸脱のゆえに一見支離滅裂なものと思える内容に統一性を与えているのは、主人公の心の働きの底に認められる法則のようなものである。主人公は絶えず自分の心の流れを一つのまとまった話にしようとしては失敗する。語りの不統一と事物の分析のまずさがために、自分の考えを読者にうまく伝えられないが、それを承知で繰り返す語り手の空しい努力がこの作品に一つのアクションを与えている、と考える<sup>(4)</sup>。

この語り手の空しい努力が父ウォルターの不毛な饒舌のパロディになっていることはすでに見たとおりである。ウォルターは「舌頭に説得力が漂い、論理学と修辭学の原理が彼のうちにみごとに混ぜ合わされている——しかも、そのうえ、相手の弱点や感情を抜け目なく推し量る才」(I—19)を持った、生まれながらの雄弁家である。古めかしい奇妙な学説に興味を持ち、また、生まれてくる子どもの幸せを念じて、自ら鼻論、命名論、教育論など次から次へと珍説を考え出しては、それを披瀝して相手を煙に巻く。しかも、思わぬ事態が生じるために自説の実現は何一つ望めない。彼はまさに「挫折の人」であり、おのれの不運を嘆かざるをえない。それでもなお懲りることなく、観念の流れに身を任せ頭に浮かぶ言葉を連ね続ける父の行為の空しさ馬鹿らしさを、語り手は鋭く、だが優しい愛情を込めて、批判し笑いの的にしているのである。

この種の行為の典型的な一例は、ウォルターが母と結婚するに際して作成させたもので、語り手が過去の記録として語りの素材にしている結婚契約書である。「本証書は、さらに次の事項を確認する。」で始まる一文は、

……上記の商人ウォルター・シャンディは、同人および上記エリザベス・モリーヌとの間に結ばれるべき、また、神の祝福によつて、十分かつ真実に厳肅なる式をあげ床入りにより完成されるべき上記意図されたる婚姻と、ならびに特に同人を動かして当該行為に至らしむるその他諸種の貴重なる原因および考慮とにかんがみ、——先に指名せる受託人等々の権限を有する紳士ジョン・ディクソンおよびジェイムズ・ターナーに対し、下記事項を承認、契約、譲歩、承諾、決定、約定し、かつ完全に同

意するものとする。……——本証書は、さらに次の事項を確認する。すなわち、上記契約をさらに有効に実行に移すため、上記商人ウォルター・シャンディは、上記ジョン・ディクソン、ジェイムズ・ターナー両氏のみならず、その相続人、遺言執行人、譲渡人に対しても、現在、彼等が下記物件に対してもつ実質上の所有権をそのまま、譲渡し、譲与し、交付し、移譲することを確認する。……下記物件とは、○○○州におけるシャンディ家の館と領地、そのすべての権利、権限、付属権益一切を含む。……——さらにこのほか、聖職任命権、寄付金、上記シャンディの牧師館・聖職録を提供しまた自由に処理する権限、及び十分の一税・教会所屬の耕地一切。(1-15, pp. 42-6)

といった調子で、ほぼ三ページ半にわたって契約の用語を連ねたもので、結婚生活における履行事項、財産、権利に関する諸事項等々、その内容は読者の意表をついた度外れた言葉の羅列となっている。

「することなすこと、仕事であろうが、道楽であろうが、万事におよその類を見ぬ几帳面な人物……極端な几帳面さの奴隷」(1-3)であり、「優れた究理家で、世にもこまごました事柄にも綿密な理屈を考えないではいられない人物」(1-4)であるウォルターは、妻との契約に齟齬をきたすことを恐れるあまり、水も漏らさぬ、と自分が確信できるような細かい条項を連ねた契約書を作成させる。それでもまだ安心がならず、この種の契約条項が明らかに母方に不正行為の機会を与える点を阻止するため、「今後、母がいかなる場合においても、虚言と偽証により、万一、父にロンドン行きの手間と費用とをかけた場合には、——必ず、母は本契約により与えられた権利と資格とを次の機会には、すべて失うものとする。——ただし、……」(1-4)といった、父方のための保証条項が加えられる。ウォルターは、妻がロンドンでお産をすることにはあまり賛成ではないという気持ちも込めてこの契約書を作成させたのであるが、いくら手拔かりを恐れるとはいえ、この契約文の異常な緻密ぶりは呆れるばかりである。彼はまるでなにかに取り付かれたかのように、やみくもに契約条項を加えていく。手拔かりを防ぐとすればするほど記入すべき条項や関連事項は際限もなく増えつづけ、それらの文言が、いわば、空中に飛び散った羽根布団の羽毛のように、

彼の頭の中で乱舞して、どうにも収拾がつかない状態になる。

語り手トリストラムは大理石模様を「この作品の象徴」であるという。たしかにそれは逸脱を繰り返し、様々なエピソードが錯綜するこの作品を象徴していると考えられる。だが、同時にこれは個々のエピソードの内容の象徴でもあると受け止められないだろうか。例えば、ここに取り上げた契約書作成時におけるウォルターの意識に実体——まるで法条項という観念の核が際限もなく分裂と増殖を繰り返したあげく、そこに発生した無数の気泡状のものが充満してしまったようなウォルターの頭の中の状態を象徴しているともいえるだろう。

一種の脅迫観念の虜となったウォルターは、正確かつ緻密な契約書を作成するという本来の目的をよそに、結婚契約に関わると思しき文言探しそのものにのめり込んでいく。ならば、すなわち、なお、なおまた、さらに——これらの接統詞を濫用する意識がそれぞれの条項の核を無数に分裂させ増殖させ、さらにその一つ一つの分裂核から類似の事項を派生させるので、契約書の作成に携わるウォルターの頭の中は、いま述べたような内部充塞の状態で、収拾不能となっている。語り手トリストラムはこの大仰な契約書の中身を、「……いや、簡単にいってしまえば、『私の母親は、本人がそれを望むなら、ロンドンでお産をしてもよい』ということだったのです。」「(1—15)と事も無げに片づけてしまふ。語り手の「簡単にいってしまえば」の一言で、ウォルターの頭の中の観念の気泡は瞬時にはじけ、充塞状態は虚仮となり、観念の重圧に拉がれたウォルターの姿は読者の目には虚像と映る。同時に、一見重々しく意味ありげにみえた法律条項が、およそ無意味な観念の連なり、空虚な言葉の羅列に過ぎないことが暴露され、そのようなことに拘るウォルターの滑稽な姿が鮮やかに浮かび上がってくる。

このウォルターの觀念の充塞と解消霧散のパターンは、彼のすべての行動と意識において繰り返される。自論がごとく覆される運命にある「挫折の人」ウォルターは、現実には、この契約書が仇となって、わが子の鼻がベツシャリと押しつぶされる不運をかこつことになる。気の進まない父を引っ張って母は上京するが、腹のほうは気もないうことがわかる。父は断固として例の条項を発動させる。その後母は田舎のシャンディ館へ戻ってトリストラムを出産することになるが、頼りないスロップ先生のいい加減な処理のために、鉗子で鼻がへしゃげてしまう話は周知のとおりである。

パンタグルーエルが発見したというアンナザンの島の住民そっくりの鼻向をもっているという妙な理由で、妻から不当にも年三百ポンドの寡婦財産を要求された曾祖父以来、三代にわたって、鼻は大なるをもって尊しとする教義を伝統として受け継いだウォルターは、名誉あるシャンディ家が曾祖父の鼻がもたらした打撃から立ち上がれないでいるため、いやが上にも息子の鼻に異常な関心と期待を寄せざるを得ない。というよりも、今ではそれは単なる期待ではなく、低い鼻を恐れるあまりの一種の脅迫觀念になっている。その妄想を振り払うように、彼は珍妙な鼻に関する書物を手元に揃え繕いては、その内容に一喜一憂する。偉大なるエラスムスの手になる大きな鼻の用途や利用法を説いた話に失望したり、乳を飲ませる婦人の乳房の軟硬の如何が子どもの鼻の形に影響するという珍説に納得したりする。あるいは、分娩時における産婦の力みが産児の脳に重大な支障を来すと知って、ショックを受け、憂慮に心が千々に乱れ、その先を読んで、逆子で生めば大脳に支障がないと知って一安心する。そして、「およそ憶説というものの常として、ひとたび人がある仮説を思いつく、あとはすべての事象を、その仮説は当然の栄養物のように同化吸

収してゆくもの」(＝IIG)であると言語手がいうように、彼はこの仮説から、「どこの家でも長男が一番アホである……弟たちが楽に通れるように道を開いてやった」(＝IIG)のだから、という珍妙な解釈を引き出してくる。

その後ウォルターは帝王切開というすばらしい手術の記事を目にして、眼前が光明に輝く思いをする。村の産婆に掛かるという母をつかまえて、「世界中の男の医師の中で、自分の意図に一番ピッタリ」(＝IIG)であり、自ら考案した鉗子をこの上なく強力な武器、こよなく安全な分娩道具と信じているスロップ先生に、いざというときの場合に備えて待機してもらえという。いざ出産となったが、母の様子がおかしい。陣痛が止まってしまい胎児はまだ出ない。様子を知らせにきたスザナーに急かされて部屋を出たスロップ先生は、産婆の案内で母の産室へ向かう。ウォルターは例によって弟トビーを相手に時間についての形而上学的論述を展開しているうちに、疲れはてて眠り込んでしまう。

ふと台所に物音がする。二階にいるものとばかり思っていたスロップ先生がいつの間にか降りてきて、台所でせつと仮の鼻骨を作っている。スザナーの話によれば、例の先生お得意の鉗子で子どもを引き出そうとして鼻を煎餅のようにべちゃんこにつぶしてしまった。その補強のために彼女のコルセットの鯨の骨の切れ端と綿で仮の鼻骨を作っているのだという。暗雲が立ちこめ嵐となって父の頭上に襲いかかってくる。

私の父は階上の自分の部屋に入るやいなや、これ以上は想像もできないほどの取り乱した姿で、ベッドにバツタリとうつ伏せに身を投げ出しました。しかしそれと同時に父の姿は、古来憐憫の目によって一掬の涙をそがれた中でもこれ以上は考えられないほどのいたましい、悲しみに打ちひしがれたものでありました。——父が最初にベッドに崩れるように身を横たえたとき、父の右手の掌はその額をささえて、両の眼の大部分をおおっていましたが、次第に少しずつ頭とともに下がって行って(脇がだんだん弱って腹のほうに寄って行ったのです)、とうとう鼻が敷布団についてしまいました。——左の腕はダラリとベッドの外にたれて、指の関節あたりが、ベッドの垂れ布の下からのぞいている渡瓶の柄のところをさわろうとしていました——右の脚も(左脚は胴体のほうに引き寄せてありました)、なかばベッドの外にはみ出して、ベッドの縁が脛骨を圧迫してい

ましたが——本人はそれを感じませんでした。顔のしわの一つ一つにも、深い動かしようのない悲嘆が刻みこまれており——父は溜息を一度つき——胸を何度か大きくふくらませましたが、言葉は一言も発しません。(III-29, pp. 224-5)

語り手トリストラムは悲しい沈着と厳肅な思いでこれを綴っているのだという。「悲しみに耐えるには……水平の姿勢が最適だ」(III-29) ととぼけたことをいって、父の様子をこと細かく説明する。その描写が詳細であればあるほど、彼の姿は得も言われないおかしさを醸し出す。語り手はさらに、「苦悩が消化されてしまう前は——慰めの言葉は時期が早すぎて役に立ちません——さればといつて消化された後では——今度は遅すぎます。……慰めの言葉をかけようと思う人の狙うべき的といったら、この両者のちょうど中間、それはほとんど髪の毛一筋ほどの細さでしかない」(III-29) などと理屈をつけ、三十分ばかり(実は一時間半ほど)この姿勢のまま置き去りにして話題を変える。

わが家の名誉のため、また生まれてくる息子の子のためにもぜひ偉大な鼻を、というウォルターの願いは「新しく考案した鉗子」のため無惨にも潰え去った。その父の様子を逐一説明するトリストラムの語り口は極めて滑稽である。「不運の人」である父の嘆く姿を「一掬の涙を」云々の言葉とは裏腹に戯画化する、しかも愛情を込めて戯画的に語る語り手自身が実の被害者であるという状況が、そのおかしさをより複雑微妙なものにする。この滑稽な笑いによって、ウォルターの頭の中で増殖された一連の憂いも、危惧の念も、悩みも、すべてがその重みを失って霧散し、読者の目には単なる観念のあそびとしか映らなくなる。

彼の嘆きにはさらに後追いの一撃が加えられる。第三巻の十一もの章と第四巻の巻頭のスラウケンベルグウス物語、および第一章を脱線話に費やし、まるまる一時間半ほどの間父をうっちゃって置いたあと、語り手は、「……やっ」とベッドのわきにたれているほうの足の爪先を、床の上にブラブラ動かし始めました。……父の左手も、この手は指の関節がその間ずーっと搜瓶の柄にもたれかかった形になっていたのですが、これまた感覚を取り戻しました——父



はその手を、ベッドの下の垂れ幕のさらに奥へ押し込み——それがすむとその手を引き上げて自分の懷につっこみ——エヘン！と咳払いをしました。」(W—C)とまた微細にわって説明を続ける。ウォルターは、やがて沈黙を破って、「一体これほどまでに人間が、なあトビーよ、……痛い目にあつたためしがあるだろうか？——私が見たかぎり一番痛い目にあつたのは」(W—C)自分だといおうとした矢先に、ナミュールの戦いに癡り固まっている弟に、「マイケの連隊にいたある擲弾兵です」(W—C)と先を越されて、「鼻を掛布団にペッチャンコに押しつけるようにして」(W—C)ぶっ倒れ、またもや先の嘆きの姿勢でベッドに横たわる。やがて身を起こしたウォルターは、弟の一撃で鼻にまつわるすべての苦悩を霧散させたのか、ふだんの平靜な心を取り戻す。

## 4

語り手トリストラムは父の苦悩について次のようにいう。

人間の一生とは何でしょうか！それはただこっちの側からあつちの側へ——悲しみから悲しみへと移り動くだけのものではないでしょうか？——自分をいらだたせる一つの原因を封じ込めて——そうしてまた別のいらだちの原因の封を開ける、それだけではないでしょうか！(W—31, p. 399)

鼻の一件のショックから立ち直った彼は、悩み多い人生の暗い面を考えるばかりではことが纏れるばかりだと自分に言い聞かせ、災難に見舞われたわが子に、その埋め合せにトリストメジスタスという偉大な名前をつけてやることを思いつく。これも思わぬ手違いから彼がもっとも忌み嫌っているトリストラムという名がつけられてしまう。その苦悩が解消されぬままに鬱々としている彼の手元に届いた伯母の手紙によって、一〇〇ポンドの遺産が手に入ること

がわかったとたんに彼はそれを当てにした計画をあこれ考える。そして、最後に思いついた二つの計画、自分の地所内のオクスムアーの荒地地に囲いをつけることと、長男ボビーを大陸旅行させることの、いずれを選ぶべきか悩み始める。甲乙つけがたい二つの計画に心は引き裂かれる思いで、またしても災いの重圧に押し拉がれんばかりになるが、今度はボビーの死という災難の知らせが入ったため、重圧から救われる。

このようにウォルターの悩みは尽きることはない。彼は次から次へと新たな不運の種を抱え込むことになる。だが、彼の悩みは奇妙な学問への拘りが彼の日常生活での判断を狂わせることから来る。自分が重大視する諸々の理論に打ち込むことはあくまでも道楽に過ぎないことを彼は認識していない。そしてその道楽が偏執となるとき、その執着が笑いを引き起こす条件となる。そのために、あそびの世界の理論を無理やり日常の世界に持ち込もうとするウォルターの愚かさがわれわれ読者の笑いを誘うのである。彼にはまったく予想できない日常の世界の偶然に翻弄され、挫折する姿をわれわれは笑うのである<sup>⑨</sup>。同時に、肉親である父の愚かしい姿をまるで他人事のようににつきはなし、しかも嘆くべきは実の被害者である自分なのだ、という主張を込めて語るトリストラムのユーモラスな語り口が、そのおかしさを増幅させていることも見逃せない。

以上みてきたように、ウォルターが頭の中に抱え込んだ観念の核はやがて活動を始め、分裂、増殖を繰り返し、そこに生じた無数の観念の気泡で内部は充塞の状態となる。それを霧散させ、解消させるのが、その実体の空虚さ、馬鹿らしさを露呈させてみせる語り手のユーモラスな語り口である。際限もなくこの観念の核の分裂、増殖、充塞、解消霧散の循環を繰り返すため、ウォルターの意識は混乱に陥る。先に指摘したように、例の大理石模様は彼のそうした意識の状態の象徴にもなっていると考えることができる。そして、この分裂―霧散の循環を繰り返すパターンは、空しい努力を承知の上で語り続けるトリストラムの心の働きの底に認められる法則のようなものと同様に、一見支離滅裂と思えるこの作品の内容に統一性を与える役割を果たしていると解することができるだろう。

- (1) 注 拙稿『センチメンタル・ジャーニー』における「囚われ」について、『文学部記念論文集』（関西学院大学、一九七九）参照。

- (2) テキストには Melvyn New and Joan New, ed., *The Florida Edition of The Works of Laurence Sterne*, (Gainesville: University Presses of Florida, 1978) を使用。本文中の引用文のあとの括弧内の数字は作品の巻、章を示す。また本文から切り離れた引用文の場合は巻、章、頁数を示す。なお、訳文に関して、朱牟田夏雄訳（岩波文庫）を参照したことを記して、訳者に感謝の意を表します。

- (3) Virginia Woolf, *The Common Reader: Second Series* (London, 1974), p. 81.

- (4) James E. Swearingen, *Reflexivity in Tristram Shandy* (New Heaven and London, 1977), p. 47.

- (5) ラブレーの『第四の書』の第九章に、'バンタグルーエルが仲間とともにアンナザンの島を訪れ、その住民の鼻がみなベチャンコであることを知る話が出てくる。アンナザンは 'noseless or flat-nosed' の意。 Cf. Melvyn New and Joan New, op. cit., Vol. III, p. 262.

- (6) 能美龍雄著『ロレンス・スターンの文学』（松柏社、一九九四年）八十三頁参照。